

Title	他者の場所：ヘテロトピアとしての博物館
Sub Title	Museum as a heterotopia
Author	浜, 日出夫(Hama, Hideo)
Publisher	三田社会学会
Publication year	2002
Jtitle	三田社会学 (Mita journal of sociology). No.7 (2002.) ,p.5- 16
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	特集: 「社会学理論と他者性」
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-20020000-0005

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

他者の場所

ヘテロトピアとしての博物館

Museum as a Heterotopia

浜 日出夫

使ひふるされし臓器が他者といふ敵地のなかに灯るしづけさ

岡井隆『臓器（オルガン）』

1. はじめに

社会学はこれまで死者というカテゴリーに属する他者をうまく取り扱ってこなかったのではないだろうか¹⁾。たとえば、古典的な例として、パーソンズの初期の社会システム論を考えてみよう²⁾。

パーソンズによれば、社会システムとは、「状況に志向する複数の個人としての行為者のあいだの相互行為の体系」（パーソンズ 1974:10）である。社会システムは「行為準拠枠」によって記述される。行為準拠枠は、行為者・行為の状況・その状況に対する行為者の志向、という3つの要素からなる（パーソンズ／シルス編 1960:4ff, 91ff）。このうち行為の状況は志向の客体からなり、行為者と相互行為を行なう客体すなわち社会的客体と、相互行為を行なうことのない客体すなわち非社会的客体とに、分けられる。社会的客体はそれ自体行為者であり、すなわち他者である（パーソンズ／シルス編 1960:22-23）。したがって、相互行為は、行為者が、それ自体も行為者である他者を志向の客体とするときに成立するものである。そして、パーソンズにおいて、行為者とは「生理的な有機体」（パーソンズ／シルス編 1960:5）、すなわち生きている者のことであった。したがって、パーソンズにとって、相互行為とは生きている者同士の相互行為にほかならず、パーソンズの世界論は生きている者たちだけから成り立っているのである。

これに対して、もはや生きていない死者たちもまた社会を構成するメンバーとして明示的に位置づけている例として、シュッツの社会的世界論を挙げることができる。

シュッツの社会的世界論は「現象学的」と称されるが、その特徴は次のふたつの点にある。第一に、シュッツの社会的世界論は、科学者にとっての社会ではなく、社会のなかで生活している行為者にとっての社会を記述したものである。第二に、それは、行為者にとっての社会を、行為者自身による反省的な自己記述によって記述したものである。すなわち、それは、行為者がいまここにおいて経験している社会を、行為者自身（つまりシュッツ自身）が、それを経験

している自分自身の意識にさかのぼって記述したものである。

そして、シュッツによれば、「社会的世界は決して同質的な世界とはいえず、むしろ多様に分節されている」(シュッツ 1982:193)。シュッツにおいて、他者は一種類ではない。他者の意識体験は多様な仕方的自我に与えられ、それにおうじて社会的世界は多様に分節されているのである。

まず、生身の身体をもった他者を直接的に経験することのできる対面状況の世界(Umwelt)と、生身の姿を直接的に経験することはできないけれども、間接的に類型として知っている同時代の他者たちの世界(Mitwelt)とがある。この二種類の他者は、いま私とともに生きている(と私によって想定されている)他者である。だが、シュッツにおいて、社会的世界は、いま生きている者たちだけから成り立っているわけではない。シュッツは、このふたつの世界にくわえて、私が生まれる以前にすでに死んでしまった他者たちの世界(Vorwelt)と、いまはまだ生まれていないけれどもこれから生まれてくるであろう他者たちの世界(Folgewelt)もまた、いまここにおいて経験されている社会的世界を構成するものとして挙げている。すなわち、シュッツの考えている社会的世界には、生きている者たちだけでなく、すでに死んでしまった人間やこれから生まれてくる人間もまた含まれているのである。ここには、観察者の観点をとるパーソンズの社会システム論と比較して、行為者自身の観点から記述を行なうシュッツの現象学的な社会的世界論の特徴がもっとも顕著に現われている。

シュッツによれば、フォアヴェルトとは、「私自身より前にあった社会的世界、私がそれにまなざしを向けることが可能である以前に、すでに経過し去り、生成し去り、完了してしまったがゆえに、私の体験や持続とは共存せず、一度も共存することのなかったような社会的世界」(シュッツ 1982:198)である³⁾。本稿では、死者、すなわちこのフォアヴェルトに属する他者について論じることにはしたい。

シュッツは、「フォアヴェルトについての経験一般がわれわれに与えられる特別な様式」(シュッツ 1982:291)として、二通りの仕方を挙げている。ひとつには、いま生きている他者による語りを通してであり、もうひとつには、現在遺されているさまざまなモノを通してである。

「フォアヴェルトについての知識は、まず第一に、ミットヴェルトについての知識と同じように、ウムヴェルトやミットヴェルトの他我の伝達作用と結びついている。……第二に、私はフォアヴェルトについての経験を、その証拠となる、最広義の記録や記念碑から手に入れる。」(シュッツ 1982:291-292)

本稿では、このうちの後者の仕方、すなわちモノを通して経験されるようなフォアヴェルトの他者について論じる⁴⁾。なかでもとくに、博物館という場所、博物館に展示されているモノを通して死者がどのように経験されるのかについて考察することにはしたい。

あらかじめひとつの例を挙げておこう。広島平和記念公園にある広島平和記念資料館には、

人の影が遺された石段が展示されている。それは原爆の熱線に灼かれて表面が白く変化した石のなかで、人が腰掛けていた部分だけが元のまま黒く残ったものである。この黒い人影の前に立つとき、われわれは、1945年8月6日午前8時15分に、この場所で石の表面を灼いたのと同じ熱線によって灼かれた人間がいたこと、そしてその人間がもはやいないことを瞬時に理解する。

ここで論じたいと思っているのは、このような種類の他者経験である。

以下、次のように考察をすすめていく。

まず、フーコーのヘテロトピア論を手がかりとして、フォアヴェルトの他者が構成される場所としての博物館の特性について考察する。そして、博物館が、墓地の、近代における機能的等価物として登場したことを仮説として述べる（第2節）。つづいて、アメリカのスミソニアン博物館で計画された原爆投下機エノラ・ゲイ号の展示をめぐる起こった論争を取り上げて、ヘテロトピアとしての博物館がまた「われわれ」を定義し創出し再生産するための場所であることを論じる（第3節）。

2. ヘテロトピアとしての博物館

池田光穂によれば、ヘテロトピアとはもともと医学用語で、「内臓が本来の場所とは異なる所にある異常」（池田 2000:23）を意味している。これがヘテロトピアの第一の意味である。

このヘテロトピアという用語を用いて空間論を展開したのがフーコーの講演「他なる空間について」（Foucault 1986）である。

この講演のなかで、フーコーは、「それらがたまたま指し示していたり、映し出していたり、反映したりしている関係の全体を疑ったり、無効にしたり、転倒させたりする仕方、他のあらゆる場と関係している、奇妙な性質をそなえた場」（Foucault 1986:24）について論じている。そして、そのような「他のあらゆる場と関係しながら、それらとは矛盾するような空間」（*ibid.*）として「ユートピア」と「ヘテロトピア」を挙げる。

ユートピアは「社会そのものを完全な形で示したり、あるいは逆立ちさせて示したりするものであるが、いずれにせよ基本的には非現実の空間である」（*ibid.*）。それは「現実の場所をもたない場である」（*ibid.*）。

これに対して、ヘテロトピアは、現実の空間になかにもいだされる現実の場所であり、「文化のうちにみいだされる他のあらゆる現実の場を表象したり、転倒させたり、またそれらに戦いを挑んだりする対抗一場であるような現実の場」（*ibid.*）である。それは、「現実のなかに位置を占めているけれども、あらゆる場所の外側にある」（*ibid.*）という意味で、ほかの場所とは異なる「他なる場所」（*other places*）である。これがヘテロトピアの二番目の意味である。

第三に、ヘテロトピアはまた「他者の場所」（*places of Otherness*）である。これは、フーコーが「逸脱のヘテロトピア」と呼んでいるタイプのヘテロトピア、すなわち「要求される規範から逸脱する行動をとる諸個人が収容されるヘテロトピア」（Foucault 1986:25）の例とし

て、精神病院や監獄を挙げていることからわかる。精神病院と監獄は、フーコーにとって、理性によって理性にとっての他者（非理性）として排除された者たちが収容された場所であった。「他なる場所」はまた「他者」のために特別に割り当てられた場所でもあるのである。この点から考えれば、フーコーのヘテロトピア論は、フーコーが『狂気の歴史』や『監獄の誕生』で追究してきた他者性の歴史学を空間論に翻訳しようとしたものであるとすることができる。それは、他者性の空間的配置を他の場所とのかかわりのなかで考察しようとする「他者性のトポグラフィー」とでも呼ぶべきものである。

フーコーは墓地もまたヘテロトピアのひとつとして挙げている。この墓地にかんする考察は、死者というカテゴリーに属する他者についての空間論的な考察として読むことができる。

「墓地はたしかに通常の文化的空間とは異なる場所である。にもかかわらず、それは都市国家や社会や村などのすべての場とかかわりをもつ空間である。なぜならどんな個人、どんな家族も墓地に親戚をもっているからである。」(ibid.)

フーコーは西洋文化において墓地の立地に生じた変化を指摘している。18世紀の終わりまでは、墓地は、都市の中心に、つまり教会の内部かそれに隣接して存在していた。それが19世紀の始めになると、墓地はしだいに都市の境界の外側に作られるようになっていく。この変化は『病』としての死という強迫観念の出現』(ibid.)と結びついていた。

「死者は生きている者に病をもたらすと考えられた。死者が家々のそば、教会の隣、通りのほとんどどまんなかに存在していること、この近さが死そのものを運ぶのである。墓地から伝染して広がる死というこの主要な主題は、18世紀の終わりまで、19世紀を通じて、郊外への墓地の移動が開始されるまでつづいた。こうして墓地は、もはや都市の神聖な不滅の中心ではなく、それぞれの家族がその暗い永眠の場所を所有している『もうひとつの都市』となったのである。」(ibid.)

かつては理性と混じり合って存在していた狂気が、理性によって理性にとっての他者である非理性のカテゴリーに分類され、排除され、監禁されるようになったのとちょうど同じように、かつて生者と隣り合って存在していた死者もまた、生にとっての他者として生から排除され、郊外の墓地へと監禁されるようになったのである。したがって、郊外の墓地は、死者を他者として排除し、隔離するための「他者の場所」であったとすることができる。

墓地が都市から退場するのとちょうど入れ替わるように、新しいタイプのヘテロトピアが都市に登場してくる。それが博物館である。

フーコーは、「他なる場所」であるヘテロトピアがしばしば「他なる時間」であるヘテロクロニーと結びついていることを指摘する。すなわち、ヘテロトピアはしばしば「伝統的な時間

との完全な断絶」(Foucault 1986:26)によって特徴づけられるのである。そして、フーコーはふたたび墓地をその例として挙げている。なぜなら、墓地は生の時間との完全な断絶によって特徴づけられるものだからである。

フーコーは、ヘテロクロニーと結びついたヘテロトピアとして、対照的なふたつの形態を挙げている。

ひとつは、移ろいやすい不安定な時間と結びついているヘテロトピアである。フーコーは、そのような「一時的なヘテロトピア」(ibid.)の例として、年に一度か二度だけ市が開かれ、露店や見せ物小屋などが立つ、都市の周縁にある空き地や、都市の住人に三週間の手軽な未開生活を提供する休暇村を挙げている。

これとは対照的に、時間の蓄積と結びついているヘテロトピアがある。そこでは時間は流れ去らない。「止むことなく積み上がり、たえず高さを増していく」(ibid.)のである。そのような「無限に時間を蓄積するヘテロトピア」(ibid.)の例として、フーコーは博物館と図書館を挙げる。

「博物館と図書館は、そこでは時間が止むことなく積み上がり、たえず高さを増していくようなヘテロトピアである。17世紀には、あるいは17世紀の終わりにあっても、博物館と図書館は個人的な好みの表現であった。これに対して、すべてのものを蓄積し、一種の普遍的な収蔵庫を打ち立てるという考え、ひとつの場所にすべての時間、すべての時代、すべての形式、すべての趣味を封じ込めようとする意志、それ自体は時間の外にあり、時間による減衰をまぬがれている、あらゆる時間からなる場所を作り出すという考え、このようにして不動の場所のなかに絶え間ない無限の時間の蓄積を作り上げようとする計画、こうしたすべての考えはわれわれの近代に属するものである。博物館と図書館は19世紀の西洋文化に特有のヘテロトピアである。」(ibid.)

フーコーは墓地の退場と博物館の登場をとくに関連づけて論じてはいないが、両者を結びつけて考えることも可能であるように思われる。両者はいずれも死者たちの生の痕跡を現世にとどめようとするものである点で共通している。米山リサによれば、“museum”という語と、壮麗な墓を意味する“mausoleum”という語は、同じ語源をもっているのである(米山 1995:180)。そうすると、病をもたらず恐れのある危険な死者たちが都市の中心から追放されたあとに、博物館が登場してくることは、博物館が、墓地に代わって、より無害な仕方で死者を表象するための場所として登場してきたことを意味していると考えられることもできる。このように考えるならば、博物館は、墓地と同じように、しかし墓地よりも安全な形で、死者を閉じ込めておくための新しい「他者の場所」として、墓地の近代的な機能的代替物として、登場してきたことになる。ここでは、これはこれ以上論じることはせず、ひとつの仮説として述べておくにとどめておきたい。

フーコーは、この講演のなかで、ヘテロトピアが現実の場所であることを強調しているが、それが現実のなかの他の場所とどのような関係にあるのかを具体的には論じていない。以下では、ヘテロトピアとしての博物館が他の場所との関係のなかでどのような機能をもっているのか、またそれが現実に生きている人間にとってどのような意味をもっているのかについて、博物館における戦争の展示をめぐる生じたひとつの論争を取り上げて具体的に考察することにした。

3. 弁当箱とエノラ・ゲイ——スミソニアン論争——

広島平和記念資料館の収蔵庫にひとつの弁当箱が保存されている。それは竹の葉の模様が描かれたアルミの弁当箱で、中には炭化して真っ黒になった豆と米が遺されている。それは、爆心地近くで建物疎開作業中に被爆した12才の少女の弁当箱である⁵⁾。遺体は確認されず、この弁当箱だけが発見された。

アメリカのワシントンにあるスミソニアン協会の国立航空宇宙博物館は、戦後50周年に当たる1995年に原爆投下機エノラ・ゲイ号の展示を行なうことを計画したが、退役軍人団体・マスコミ・議会の激しい反対によって、結局、当初の計画は中止されることになった(ハーウィット1997; エンゲルハート/リネンソール編1998)。この論争では、解説パネルの文章が日本に同情的すぎないかどうかや、原爆を投下せず本土上陸をした場合の推定死傷者数、いいかえると原爆投下によって何人の人間が「救われた」のかなどが、主要な争点となった。しかし、この弁当箱もまた論争のなかで隠れた重要な役割を演じたのである⁶⁾。

国立航空宇宙博物館が計画した当初の展示の方針はエノラ・ゲイを「歴史的な文脈の中で展示する」(ハーウィット1997:xi)ことであった。この方針に沿って、1994年1月に完成した展示台本第一稿「岐路：第二次世界大戦の終結、原爆、そして冷戦の幕開け」(National Air and Space Museum 1994; ノビーレ/バーンステイン1995)では、エノラ・ゲイの機体前部が展示される第三部「原爆の運搬」の前に、太平洋戦争の最終局面を描いた第一部「終戦への戦い」と、トルーマンによる原爆投下決定の経緯を検証する第二部「原爆投下の決定」が置かれている。そして、第三部の後には——エノラ・ゲイを「歴史的な文脈」に置こうとするかぎり当然であるが——原爆投下の結果もたらされた被害が、広島平和記念資料館と長崎国際文化会館(当時)から貸し出される被爆資料や写真、被爆者の証言などによって具体的に描かれることになっていた。そして、少女の弁当箱もまたこの第四部「グラウンド・ゼロ」に展示されることになっていたのである。

この弁当箱は、展示台本第一稿の完成後、そのなかの具体的な文章や推定死傷者数の数字が問題とされるはるかに以前から、退役軍人たちの懸念の焦点となっていた。空軍の退役軍人を組織した空軍協会の事務局長はすでに1993年9月に国立航空宇宙博物館のハーウィット館長に宛てた手紙のなかで懸念を表明している。

「この趣意書は戦時中の日本と米国を、それぞれの参戦が道義的に同等であったかのように扱っています。そうでない場合でも、信じがたいことに、侵略国であった日本に有利な判断を下している。……展示物も感情に訴えるもの（たとえば少女の弁当箱）が選ばれ、強硬なものを見方を押しつけようとしているように思われます。」（ハーウィット 1997:217. 中略は原著者による）

そして、展示台本第一稿が完成すると、空軍協会の『エア・フォース』誌はふたたびこの弁当箱に言及しながら展示計画を次のように批判した⁷⁾。

「展示計画で展示の『感情センター』と呼ばれている場所〔第四部〕に陳列するために学芸員たちが集めているのは、焼けた腕時計、壊れた柱時計、犠牲者の写真——これらは等身大に引き延ばされる——などに加えて、溶けて壊れた宗教関係の物品である。中身の豆と米が炭化した少女の弁当箱も展示される。これらが見逃されることのないように、『できるかぎり、これらの物品の持ち主、あるいは着ていた人々の写真を使って、現実に生きていた人々が展示物の背後にいたことを示す』と記されている。ヒロシマ・ナガサキの被爆者が自らの言葉で恐怖を回想することになっている。」（ハーウィット 1997:272-273）

展示台本第一稿によれば、この弁当箱は次のようなキャプションとともに展示されることになっていた。

「渡辺玲子の弁当箱

この弁当箱は広島市立第一高等女学校一年生の渡辺玲子のものであった。内部には炭化した豆と白米が遺されているが、白米は戦時下では珍しいごちそうであった。この弁当箱は市内材木町地区にある誓願寺の南側の塀の近くで見つかった。渡辺玲子の遺体は発見されなかった。」（National Air and Space Museum 1994 EG400:31）

退役軍人たちを過剰とも思われる反応に駆り立てたものは、まさにこの弁当箱の「背後にいた」少女の影であった。退役軍人たちにとって、戦後 50 周年の年に、エノラ・ゲイが展示されるとすれば、その機体を通して想起されるべき死者とは、グラウンド・ゼロで死んだ少女ではなく、自由を守るための「正義の戦争」で命を落としたアメリカの兵士たちでなければならなかった⁸⁾。エノラ・ゲイが少女の弁当箱と並べて展示されるということに対する退役軍人の反発は次のような言葉のなかによく示されている。

「ある退役軍人は、自分がかつとも恐れることは、子どもたちや他の見学者が『アメリカの従軍兵士たちは……戦争挑発屋であったか、血に飢えていたか、あるいは復讐心から行動し

たのだと感じて展示場を去っていく』ことだ、とわれわれに話してくれた。」（リフトン／ミッチェル 1995 下:120. 中略は原著者による）

エノラ・ゲイと少女の弁当箱を並べて展示するという国立航空宇宙博物館の計画が引き起こした論争は、博物館が単に死者たちが遺したモノを収めておくための収蔵庫ではないことをよく示している⁹⁾。理性が他者を非理性として排除することを通して、自己を理性として確認していたように、「他者の場所」としての博物館もまた、死者たちの生の痕跡を示すモノを収集し保存し展示することを通して、現在生きている人間が自分自身が何者であるのかを定義し確認するための場所であり、またときにはこの定義をめぐる——「正義の戦争を戦った英雄」であるのか「血に飢えた戦争挑発屋」であるのかをめぐる——闘争が繰りひろげられるアリーナでもある。「他者の場所」としての博物館は同時に「われわれ」が定義され「われわれ」が作り出される場所でもある¹⁰⁾。

4. エノラ・ゲイ展——結びにかえて——

博物館側による度重なる展示台本の改訂にもかかわらず——弁当箱はすでに展示計画から除かれていた——退役軍人団体の反対は収まらず、結局、95年1月に展覧会の中止が決定された。筆者は、当初計画された展示に代わって、95年6月から開催されたエノラ・ゲイ展を、96年10月に見学した。

この展覧会は、当初計画されていた展示の第三部にほぼ相当するものであった¹¹⁾。すなわち、エノラ・ゲイの機体を、前後の歴史的な脈から切り離して展示したものであった。そこにはもちろん、エノラ・ゲイによる原爆投下をもたらした結果を示す被爆資料はいっさい展示されていなかった。

じっさいに現場に行ってみてすぐにわかったことは、国立航空宇宙博物館が現実の空間のなかで占めている位置そのものがこの論争における重要な要因であったことである。

航空宇宙博物館は、スミソニアン協会の他の博物館や美術館とともに、連邦議会議事堂とワシントン・モニュメントの間にまっすぐ伸びる「モール」と呼ばれる緑地に面して建っていた。航空宇宙博物館に対する非難決議を行なった連邦議会議事堂の建物は、航空宇宙博物館の窓からは、のしかかるように間近にせまって見える。ワシントン・モニュメントからさらにまっすぐ進むと正面にリンカーン・メモリアルがあり、巨大なリンカーン像がワシントン・モニュメントをはさんで連邦議会議事堂と向き合って座っている。このモール周辺には、戦争にかかわる記念碑や博物館が点在している。リンカーン・メモリアルの足元には、ベトナム戦争記念碑と朝鮮戦争記念碑があり、ワシントン・モニュメントの近くにはホロコースト記念博物館が建っている。そして、リンカーン・メモリアルからさらに進んで、ポトマック川を渡った向う岸がアーリントン国立墓地である。アーリントン墓地には、南北戦争以来、米西戦争、第一次・第二次世界大戦、朝鮮戦争、ベトナム戦争、湾岸戦争で戦死した兵士、ケネディなどの国民的

英雄、24 万人以上が埋葬されている。この墓地のなかには、有名な硫黄島記念碑や、アンダーソンが「鬼気せまる国民的想像力が満ちている」（アンダーソン 1997:32）と形容した無名戦士の墓がある。

航空宇宙博物館を含むこの広大な空間全体が「鬼気せまる国民的想像力」で充満した「他者の空間」であった。この空間のなかでは、少女の弁当箱はあまりに異質な要素であったのかもしれない。それは、もともとの意味でのヘテロトピア、すなわち「本来の場所とは異なる」場所を占めるものであった。そして、比喩的に言えば、移植された臓器が他者の身体のなかで拒絶反応を引き起こすように、「本来の場所とは異なる」場所に置かれようとした弁当箱が、「われわれ」のアイデンティティを守ろうとする強い免疫反応を引き起こしたのだと言えることができるだろう。

他方、エノラ・ゲイの銀色に輝く機体もまた、筆者のなかに、ある反応を引き起こしていた。筆者は見学記録のなかに次のように書いた。

「筆者ははじめは特別な感情もなしに展示の記録を取っていた。だが、誇らしげにエノラ・ゲイを見上げる退役軍人らしい男たちや、エノラ・ゲイの前で笑いながら記念写真を撮っていく家族連れや、“It was necessary.”（おそらくは『原爆投下は必要だった』の意）とひとりごとを言いながら箱にコメントを入れていく老人を見ているうちに、しだいに不機嫌になってきた。それが『怒り』であることに気がついて、自分でも驚いた。筆者は戦後の生まれであるし、筆者の親戚や知り合いに広島や長崎で被爆した人はいない。原爆に個人的には恨みはないはずであった。だが、その怒りは、明らかに原爆を落した『アメリカ人』に対する『日本人』の怒りであった。記念碑としてのエノラ・ゲイは、年齢も性別もエスニシティも階級も異なる多様な人々を『アメリカ人』にただけでなく、同時に筆者を『日本人』にしていた。」（浜編 1997：59）

この反応は、少女の弁当箱もまた、もうひとつの「国民的想像力」と結びついているのではないかという推測に導く。この推測を検討するために、この弁当箱が眠る「本来の場所」である広島平和記念資料館に赴くことが、次の課題である¹²⁾。

【註】

- 1) 近年、死者についての経験を社会的考察の主題とする研究が増えてきている。日本では、たとえば [荻野1998] [副田編2001] [今井2001] [荻野編2002]。先駆的なものとして [高橋編1983]。歴史学では、たとえば [アリエス1990]。
- 2) [油井2000] によれば、パーソンズは娘の自殺（1964）を契機として、晩年、死を主題化するようになったという。ここでの議論はあくまで初期の社会システム論に限定したものである。

- 3) シュッツの実際の父親はシュッツが生まれる直前に亡くなっている (森 1995:23)。この「私がそれにまなざしを向けることが可能である以前に、すでに経過し去り、生成し去り、完了してしまったがゆえに、私の体験や持続とは共存せず、一度も共存することのなかったような社会的世界」の原型は父であったかもしれない。
- 4) [浜2000] では、場所と集合的記憶の関係について、アルヴァックスの集合的記憶論の視点から論じた。
- 5) 学芸員によれば、常設展示されている男子中学生の弁当箱が貸し出されているときに代わりに展示されたり、国内や海外で開催される原爆展に貸し出される以外は、通常は展示されていない。広島平和記念資料館のホームページ「ヒロシマ・ピース・サイト」(<http://www.pcf.city.hiroshima.jp/peace-site/>)にある「平和データベース」にアクセスすることによって見ることができる (利用申請が必要)。
- 6) スミソニアン論争のなかでこの弁当箱が果たした象徴的役割を指摘したのとして、[ダワー1998]。
- 7) このようにアメリカで「少女の弁当箱」が争点化していった一方、日本では、時期は不明であるが、貸し出される予定の弁当箱が、常設展示されている男子中学生の弁当箱に差し替えられていた。1993年11月30日の朝日新聞夕刊 (西部本社版) が、広島市が被爆資料の貸し出しを決定したことを報じた記事のなかでは、まだ「被爆で焦げた女学生の弁当箱」と書かれていたが、その後は単に「焼け焦げた弁当箱」として報道された。そして、95年1月、当初計画されていた展示が中止され、資料の貸し出しも行なわれないことになったときには、貸し出される予定であった弁当箱はこの男子中学生のものであったとして報道されている。この間の事情については、ダワーの次のような記述がある。「内密の説明によれば、玲子の母親が結局この娘の最後の遺品を、ぞんざいに扱われるかもしれないアメリカに行かせることを拒否したからだそうだ。」(ダワー1998: -18-, 注41)
- 8) 94年9月23日に満場一致で可決された国立航空宇宙博物館を非難する上院の決議文はこれをあからさまに表現している。「国立航空宇宙博物館によるエノラ・ゲイに関する展覧会は、第二次世界大戦中に合衆国に忠実に献身的に奉仕した男女に適切な思いやりを表すべきであり、自由のために命をささげた人々の記憶に異議を唱えるようなことは避けるべきであるというのが、上院の意向である。」(ダワー1998: -11-, 注10)
- 9) [浜2002] は、この点について日本のある地方都市の博物館を取り上げて別の角度から論じた。
- 10) このことは戦争展示を行なう歴史博物館にだけ当てはまるのではない。異文化展示を行なう民族学博物館、さらには美術館や動物園にも当てはまる。この点については、[吉田1999] [浜forthcoming] を参照。
- 11) この展覧会の詳細な記録は [浜編1997] を参照。
- 12) ヘテロトピアとしての広島平和記念資料館と広島平和記念公園についてさらに考察をつづける予定であったが、すでに予定の紙幅が尽きている。機会をあらためて論じることにしたい。広島平和記念公園を訪れたブルマの次の文章だけ最後に引用しておきたい (ブルマはオランダ人である)。「この地を訪れる者、特に白人にとっては——それは必ず外国人であり、たいていはアメリカ人だと日本人は決めてかかっているが——原爆の残したものを忘れることはできない。数多くのモニュメントや史跡の銘板や慰霊碑のせいばかりではなく、平和記念公園を歩くと白色人種は自意識過剰にさせられるか

らである。つかつかと近寄ってきて、『これはあんたたちのやったことだ。あんたたちは人殺しだ』などと言う無礼な日本人はいない。しかし、引率の先生に促されて近づいてきた生徒たちから、平和についてどう思うかなどと聞かれると、罪ほろぼしの意思表示をするか、少なくとも後悔の言葉を口にしようかという気になる。あなたは、多くの日本人が原爆を落とした張本人だと思っている白人という人種を代表して、平和を宣言するよう求められているのだ。」(ブルマ1994:118)

【文献】

- アンダーソン 1997 白石さや・白石隆訳『増補想像の共同体』NTT出版。
- アリエス 1990 成瀬駒男訳『死を前にした人間』みすず書房。
- ブルマ 1994 石井信平訳『戦争の記憶』TBSブリタニカ。
- エンゲルハート／リネンソール編 1998 島田三蔵訳『戦争と正義』朝日新聞社。
- ダワー 1998 「三つの歴史叙述」, エンゲルハート／リネンソール編 1998 所収。
- Foucault, M. 1986 "Of Other Spaces", *Diacritics*, 16-1.
- 浜日出夫編 1997 『戦争と博物館——スミソニアンと土浦——』筑波大学社会学類。
- 浜日出夫 2000 「記憶のトポグラフィ」『三田社会学』第5号, 三田社会学会。
- 2002 「歴史と集会的記憶——飛行船グラフ・ツェッペリン号の飛来——」『年報社会学論集』第15号, 関東社会学会。
- forthcoming 「メディアとしてのミュージアム——ふたつの展覧会をてがかりとして——」, 若林直樹編『イメージ編集』武蔵野美術大学。
- ハーウィット 1997 山岡清二監訳『拒絶された原爆展』みすず書房。
- 池田光穂 2000 「物神化する文化」『三田社会学』第5号, 三田社会学会。
- 今井信雄 2001 「死と近代と記念行為」『社会学評論』第51巻第4号, 日本社会学会。
- リフトン／ミッチェル 1995 大塚隆訳『アメリカの中のヒロシマ』(上・下) 岩波書店。
- 森元孝 1995 『アルフレート・シュッツのウィーン』新評論。
- National Air and Space Museum 1994 *The Crossroads: The End of World War II, the Atomic Bomb and the Origins of the Cold War*, First Script. (部分訳を含むものとして、ノビーレ／バーンステイン 1995)
- ノビーレ／バーンステイン 1995 三国隆志他訳『葬られた原爆展』五月書房。
- 荻野昌弘 1998 『資本主義と他者』関西学院大学出版会。
- 荻野昌弘編 2002 『文化遺産の社会学』新曜社。
- パーソンズ 1974 佐藤勉訳『社会体系論』青木書店。
- パーソンズ／シルス編 1960 永井道雄・作田啓一・橋本真訳『行為の総合理論をめざして』日本評論社。
- シュッツ 1982 佐藤嘉一訳『社会的世界の意味構成』木鐸社。
- 副田義也編 2001 『死の社会学』岩波書店。

- 高橋三郎編 1983 『共同研究・戦友会』 田畑書店.
米山リサ 1995 「越境する戦争の記憶」『世界』1995年10月号, 岩波書店.
吉田憲司 1999 『文化の「発見」』 岩波書店.
油井清光 2000 「アメリカに死す」『五十周年記念論文集』 神戸大学文学部.

(はま ひでお 慶應義塾大学文学部)